

棚田学会通信

第21号 2007年3月15日
 発行/棚田学会
 〒184-8577 東京都小金井市本町6-5-3
 (ふるさときゃらばん内)
 TEL:042-381-6721 FAX:042-383-8614



「山形の棚田」見学会での記念写真('03年6月)
 (撮影:高橋信博)

◆故木村尚三郎会長追悼

- ・「棚田学会会長 木村尚三郎さんを偲ぶ」ふるさときゃらばん脚本・演出家 石塚克彦(棚田学会副会長) … 2
- ・「農業・農政に文化的尊敬の光を」東京大学大学院農学生命科学研究科客員准教授 山岡和純(棚田学会理事) … 3

◆会員通信

- ・「オーナーが荒れ果てた棚田を再生『川原白瀧棚田』」いなべ市川原白瀧棚田世話人 伊藤 守… 4
- ・談話会「第2回若手研究発表会」信州大学農学部 佐々木邦博…………… 5
- ・談話会「映像で見る世界の水田 日本の水田」講師:田淵俊雄 元三井物産穀物部長 高木宏明… 6

◆日本の棚田百選

- ・「内成の棚田—別府市大字内成—」棚田里山景観研究所 後藤幸彦 …………… 7

◆新刊紹介 …………… 8

◆事務局ニュース …………… 8

故 木村尚三郎会長追悼

棚田学会会長 木村尚三郎さんを偲ぶ

ふるさときゃらばん脚本・演出家

石塚克彦

(棚田学会副会長)

もう12年前になるだろうか、高知県梶原町の町長・中越さんと初めての棚田サミットを仕掛けたときである。その頃、棚田サミットを仕掛けると言っても、日本の何処に、どんな棚田があるのかさえわからなかった。

そこで私は、農水省に協力を頼むと同時に、ふるさときゃらばんの全国公演で知り合った各地の首長や役場職員、カメラ雑誌などを通して、棚田の写真コンクールを呼びかけた。

そのコンテストの審査員は、当時・日本写真家連盟の会長をやっていた藤本四八さん、カメラ博物館の館長でもある元・文部大臣の森山真弓さん、森山さんは写真を撮るのも上手い。それに報道カメラマンの英伸三さんと農民作家の佐藤藤三郎さんと私である。写真コンテストは、審査員の質と信用で決まると言われているが、全国から数百点にのぼる質のいい棚田の写真が集まって来たのだから、審査員の顔ぶれはそれなりに評価されたのだと思う。そして何より、この全国から応募して来た写真によって、日本の何処にどんな棚田があるのか知ることが出来、棚田サミットを呼びかける根拠にもなった。

さらに、それらの写真は、講談社から、おそらく日本で初めての棚田の写真集として、私の文章も併せて出版された。その写真集を木村尚三郎さんに贈ったところ、いたく共感してくれ、それ以来、木村さんは、いたるところで棚田について語ってくれるようになった。

木村尚三郎さんは、日本の農業問題のあり方を考え示す、農業基本問題調査会の座長をやっていた人でもある。棚田への関心を集めるスピーカーとしては、誰よりも大きな拡がりをつくってくれた。

それ以前からも顔見知りではあったが、それから私のつくる芝居も観に来てくれるようになり、「舞台の上のものがたりが、全く僕の考えていることと同じで、妙な気分にはせられるよ」などと喜んでくれ、一緒に楽しい酒を飲むようになった。

想えば、棚田学会の初代会長の石井進さんとの酒の入った会話も実に楽しかった。日本中世史が専門の石井さんは、歴史の話を、まるで活劇のようにドラマチックに語ってくれた。その石井さんが逝ってしまったとき、ほんとうに困りはてた。

棚田学会は、農業土木、地理学、民俗学、農学、歴史学に田んぼを耕している農民から、歌人、ちな

みに私は芝居屋だ。文系理系を問わず、棚田にかかわるあらゆる人が集まっている学際的な集まりである。こんな間口の広い学会の頭がつとまる人などめったに居ないと思っていたからである。

そしたら木村尚三郎さんが居た。

木村尚三郎さんとはいったい何者だろう？芝居や食べ物のお話をしても面白いし、民俗や自然環境の話もユニークな蘊蓄(うんちく)を聞かせてくれる。私が芝居の脚本のネタとしている現代の日本人のオカシさなどの話になると、ほとんど意気投合してしまう。そして古い文学から鬼平犯科帳の台詞(せりふ)まで会話にとび出して来る人なのである。

興味をそられると何にでも首をつっこみ、ひよこひよここと出かけて行くという腰の軽い人であるようだ。そんなので、棚田学会の会長も引き受けてくれた。

会長になっていただいてからも、顔を合わせると「石塚さん、何かいま、僕のやらなきゃならないことアル？」と聞いてくれた。私の方は「あるときは、しっかりお願いしますから」というのが常だが、一昨年は国際コメ年日本委員会の会長をお願いした。

木村尚三郎さんが愛知万博の総プロデューサー引き受けたというので、私も、万博では二つのミュージカル作品を二つのパビリオンで上演した。これも喜んでもらうことが出来た。そして、三年後には奈良での平城京遷都千三百年記念行事を引き受けたので「石塚さん手伝ってくれるよネ」と言われていた。そして私は、その話とパーティーのように、棚田博物館を立ちあげるのに手を貸してくれるよう頼んでいた。

その両方とも一緒にやらずに木村尚三郎さんは逝ってしまった。

棚田学会は、その学際的な幅の広さと、面白さをかもし出してくれる会長をまた失ってしまった。木村尚三郎さんを頭に、棚田を大切に守る動きのパンチのある一波を仕掛けようとしていた矢先だっただけに、私たちは呆然とした。いまは、残った私たちで行動を続行せねばならないと思い直している。

それにしても、木村尚三郎さんの専門である、フランス中世史からつむぎ出した話を、じっくりと聞かずに別れてしまったことはほんとうに残念である。木村尚三郎さんの発想の自由さや、その中から訴えて来る深い説得力の強さの謎が、きっと見せてもらうことが出来たらうにと……。

人間は私も含め、いずれはあの世に行く。そうしたら、また、一緒に面白いことやろうかという木村尚三郎さんが、ヨーロッパ風の天使のように頭に光る環を乗っけてニコニコしている姿に、会えるかも知れない。



山形県山辺町作谷沢の集落を散策する



平成 17 年棚田学会賞授賞式記念写真

農業・農政に文化的尊敬の光を

東京大学大学院農学生命科学研究科客員准教授

山岡和純
(棚田学会理事)

私は農林水産省で行政畑の仕事に 20 年来携わって参りました。そのような私にとっての木村先生の第一印象は、平成 9 年 4 月に橋本龍太郎総理大臣の諮問機関として発足した「食料・農業・農村基本問題調査会」の会長としての姿が、やはり原点となります。

この調査会は、昭和 36 年制定の農業基本法に代わり、時代の要請を受けた農政の基本方針を審議して総理に答申するために設置されたものです。調査会には農学系の重鎮をはじめ各界の錚々たる面々が名を連ねていました。

一見農政とは縁が遠そうな西洋中世史をご専門とされていた木村先生が、この調査会を率いられて審議を重ね、平成 10 年 9 月に小渕恵三総理大臣に答申を提出するに至りました。その答申には、経済至上主義がもたらしたわが国農業農村の厳しい現状認識と地球規模での食糧問題や環境問題の反省にたち、食料の安定供給の確保、農業・農村の多面的機能の発揮、食料・農業分野における国際貢献の必要性などが「基本的考え方」として明快に示されました。

木村先生の情熱とリーダーシップにより、棚田に対する文化的尊敬のまなざしも、この時に初めて総理大臣への答申というハイレベルの文書に位置づけられたのです。一方、私は在オランダ日本国大使館での 3 年間にわたる勤務を終えて帰国し、農林水産省の経済局国際企画課で国際交渉などに 2 年間携わった後、平成 8 年から 10 年まで構造改善局開発課で中山間事業推進班の班長（課長補佐）を務めさせていただきました。この時に棚田地域等緊急保全対策事業を創設するなど、棚田を農政の施策の対象として公式に認知することに成功したわけですが、木村先生が農政の基本方向という大本営の議論を

引っ張っておられる姿を仰ぎ見ながら、私も現場の事業制度の創設というレベルで戦友の一人として汗をかかせていただいたことを思い出します。

その後、この答申の理念は、平成 10 年 12 月に農林水産省から公表された「農政改革大綱」を経て、平成 11 年 7 月に「食料・農業・農村基本法」の制定・公布という形で結実しました。

木村先生の旺盛な執筆活動にはただただ頭が下がるのみですが、私ども農政関係者に関わりの深い昭和 63 年刊行の『「耕す文化」の時代』から『美しい「農」の時代』までの 10 年間に、単著だけで 15 冊もの書籍を出版されています。まさに「文化の鉄人」と称えられるべき偉業であり、その言葉の持つ力で木村先生は、後の世に 21 世紀の農業・農政の恩人と呼ばれるに相応しい理念、すなわち農業・農政の世界に文化的尊敬の光を当ててくださったのです。

お元気な頃には棚田学会の理事会に毎回出席して飄々とした語り口で議論の口火を切ってください、正直「こんな偉い先生が何と律儀な」と驚きました。きっとあの世でも先代会長の故石井進先生と絶妙のコンビを組まれて、茶目っ気たっぷりに東洋西洋の神々を唸らせているに違いありません。



会員通信

オーナーが荒れ果てた棚田を再生 「川原白瀧棚田」

いなべ市川原白瀧棚田 世話人 伊藤 守

川原白瀧棚田は、三重県の最北端、養老山脈の中腹に位置し川原地区にあります。ここは人口554人、耕地面積約38ha、集落から約2km離れた場所にあり、江戸時代に開田された大小200枚からなる約3haの棚田です。

この棚田は、一連の棚田でしたが、40aを残して耕作放棄地になってしまい、笹と葛に覆われていました。

平成12年の国の政策である「中山間地域直接支払制度事業」に取り組むことになり、地区が市や県と協議を重ねる中で、先祖が苦勞して切り開いた田をつぶしてしまいたくない、地域の資産である棚田を復活させたい、との棚田再生の思いを抱くに至りました。

そこで、地元有志8名が棚田保存会を発足させ、棚田復活の検討が始まりました。集落内の農業者だけでは棚田の復活や維持管理は困難なことと、棚田やその周辺の自然環境は地域の水源維持に重要な役割を果たしているとの観点から、広くオーナーを募集することにしました。新聞に、「荒地に稲穂 土を愛する人募集 棚田復活体験講座」という見出しを掲載し、大きな反響があったものの、こんな荒れ果てた棚田の復元ができるだろうか、オーナーが来てくれるだろうか、とても不安でした。とにかく棚田の現状を観てもらおうと、平成13年11月に棚田参観日を設けたところ、その中から初年度15組のオーナーが誕生しました。

当初、荒れた棚田を借りるという形で、保存会代表が土地所有者と土地利用権設定を結んでスタートしました。しかし、中には地主の理解を得られず借りることができない場所もありました。オーナーたちは直接地主に交渉し、その熱意が通じてやっと借りることができた場所もありました。

平成14年4月、種まきからスタートし、棚田復活と安心して安全なお米づくりをオーナーと共に目指し、作業に取り組みました。この棚田は、いわゆる観光農園ではなく、ほんとうに農業を楽しみたい人々の集まりで、お客様としてのオーナーではなく、自ら活動主体となり、荒れた水田を少しずつ切り開き、田植えや収穫などの作業をしています。そして、その活動を地元役員や市が支援する形をとっています。

オーナーは自分たちが話し合っただけで活動方針を決めていき、会長も規約もない自由な雰囲気の中で活動



皆で稲刈りした平成18年の収穫祭



古代米も栽培している棚田 撮影：伊藤 深

をしています。オーナーはいろんなアイデアを出し合い、市や地元役員が裏から支え続けアイデアを実現することで、どんどん新しい取り組みが生まれています。オーナーにやりがいのある農業を提供するこのシステムで、多い人で年間100日以上、ほとんどのオーナーが40日以上この棚田を訪れ、作業をしていきます。

田の一枚一枚が小さいため、大きな機械は入りません。が、農家で使われなくなった耕耘機やバインダー、コンバインなどの農機具を集めて使えるよう整備したり、少しずつ棚田を復元したり、一年を通じて作業をしています。

作付け作目も、オーナーがアイデアを出し合っただけでいろいろな品種に挑戦しています。古代米や、酒米、レンコン、マコモなどを減農薬・無農薬で栽培しています。酒米はオーナー自ら酒造会社と交渉し、オーナーも酒造りの作業にかかわりながら“川原白瀧鈴麗酒”を造り、地元特産品として生まれました。また、休憩する小屋や作業舎、農機具庫などもすべて廃材などを使って、オーナーと地元役員の手作りの建物です。

平成16年度末には地道な努力が実り、「東海美の里100選」に認定されました。

棚田を復元することにより、小学生の自然学習や企業の社会貢献活動の場所として提供することができ、さらに、棚田米のオリジナル米袋もでき地域の活性化につながっています。

今後の課題と方向性については、まず獣害対策が急務であり、また過疎と高齢化が進む中でこれからは、都市との交流や都市住民の定着による遊休農地の利用や里山整備も含め新しいふるさとづくりにつながる事が期待されています。そのためには、集落が負担に感ずることなく、地域に何某かの還元が出来るようにオーナーのネットワークをフルに活用し、癒しの里づくりに励みたいと思っています。

談話会

第2回若手研究発表会

信州大学農学部 佐々木 邦博

平成18年10月14日土曜日に第12回棚田学会談話会「若手研究発表会」が新宿にある環境文化創造研究所で開催されました。

第1部では静岡県賀茂郡松崎町にある三浦（さんば）小学校の6年生の皆さんが発表しました。農業体験をした石部の棚田は西伊豆の海が見える場所にあります。

6年生8名が「棚田での米作り」と題して、5年生の時の総合的な学習の時間を中心にして1年間体験した棚田学習を発表しました。

順番に紹介しますと、①塩水選・消毒・もみまき・水くれ、②れんげ刈り、③田起こし、④あぜ切り・穴埋め、⑤代かき2回、⑥あぜ塗り、⑦田植え、⑧水の管理、⑨草取り・稲の病気や害虫、⑩イノシシよけ、⑪スズメよけ、⑫稲刈り、⑬脱穀、⑭もみ干し、⑮米づくりから学んだこと、です。

1年間にわたり棚田で本格的に米づくりを体験した様子が、スライドと説明により生き生きと伝わってきました。説明するそれぞれの生徒の表情からも、棚田学習は充実した思い出だったことが読み取れました。三浦小学校は今年度をもって閉校する事が決まっているそうです。残念なことです。

次に、栃木県立宇都宮白楊高校の農業クラブに所属する9名の高校生により、棚田を中心とした活動が発表されました。

「地域の文化を育む棚田の再生を目指して」というテーマで、栃木県茂木町の放棄された棚田を再生した活動が紹介されました。高校からはちょっと遠い所にあるのですが、根気よく通って、再生活動を行う様子が印象的でした。発表の項目ですが、①研究の動機、②地元との交流会、③活動概要、④再生活動1：測量、⑤再生活動2：水源の確保と水路の整備、

⑥再生活動3：水田の再生活動、⑦再生活動4：黒米の栽培、⑧再生活動5：景観美化、⑨棚田と地域文化、⑩棚田周辺の自然調査、⑪棚田学会との交流、⑫茂木町長や地元の方からの激励、⑬今回の活動が教えてくれたこと、⑭これからの活動、です。

棚田を再生する活動を通じ、棚田のみならず棚田の景観や周囲の自然、さらにその地域の文化にまで関心を広げ、棚田をより深く理解していこうという姿勢が頼もしく思えました。

第2部では若手の研究者により、研究報告、事例報告が行われました。

まず、東京大学大学院新領域創成科学研究科の三浦正史さんから、「福岡県星野村広内地区の棚田景観認識」と題して、研究発表がありました。棚田景観をその地域の住民たちがどのように認識しているのかという点が、この研究の視点です。面白かったのは、村民100名にアンケートに答えてもらうと同時にインスタントカメラを渡し、1年間に好ましいと思う星野村の景観を撮影してもらったことです。

いろいろなことが明らかにされたのですが、高い場所から付近を見渡す鳥瞰的な構図の写真や、近距離での石垣の写真が多かったことが興味深く感じました。やはり、パノラマ的に、山麓の地形の中での棚田の景観が良く思えるのであり、また、石垣の美しさも欠かせないという点を、景観を見慣れている住民も感じていることが、印象的でした。

最後に農村工学研究所の栗田英治さんにより、「データベースから見る棚田の景観」と題して、新潟県東頸城地域を対象とし、撮影年代が異なる2枚の空中写真を用いて棚田の変化を捉え、その要因を探る研究の結果が発表されました。

さまざまなことがわかっていくのですが、いろいろある変化の様子をパターンに分けて分析してみると、農家が機械化などへの対応を目的とした1枚の田の面積の拡大、一方で地域の高齢化による耕作放棄などによる水田の面積の縮小、これら2点が、変化の基本的な要因であることが明確化されていました。棚田の将来を考えていくうえで必要な点を再認識させられた次第です。

今回、初めて若手研究会に参加したのですが、小学生と高校生の熱意に心打たれ、また若手研究者による棚田存続への思いを込めた研究にも感心しました。

発表された皆さん、ありがとうございました。

談話会

映像で見る世界の水田 日本の水田

講師：田 淵 俊 雄

元三井物産 穀物部長 高 木 宏 明

12月2日「葛飾区郷土と天文の博物館」での談話会は、地元の住民の方も大勢参加され、豊富な知識と沢山の映像が駆使された、楽しい、判りやすい講義となった。「米」は我々日本人にとって最も馴染み深く大切な食材であるが、如何に知らないことが多いか、再認識することになった。

「水田」というと、アジアのイメージである。確かに粳ベースで5.5億トン強の世界生産量のうち92%以上がアジアのモンスーン気候帯でとれる。中国1.8億トン、インド1.1億トン、インドネシア4,800万トンが三大生産国で、日本は1,000万トンの世界第8位となる。欧米は麦類やとうもろこしの畑作主体に見られるが、実は、アメリカ・豪州は日韓台湾に米の自由化をせまった輸出国だし、フランス・イタリア・オランダ・スペイン・ブラジルでも栽培されており、近年、ネスカメなどの陸稲が飢餓対策で、アフリカ諸国でも生産されている。米食には、伝統的な炊飯、焼き飯以外にも米うどん・米パン・ライスペーパー・ピラフ・パエリア・リゾット・ジャンバラヤなどあり、多種多様である。実に世界の27億人が主食としている。

イタリアは、映画「にがい米」で思い出されるポー河流域が有名で、直播、大区画機械化されているが、代掻きもする。フランスはカマルグ湿地帯で、オランダは干拓畑地での栽培、風車排水、暗渠排水と、さすが水周り技術は優れている。豪州は大半が乾燥地帯で、米作はニューサウスウェルズ州で200ha、日本の200倍もの大区画で飛行機播種もある。水は有料でカリフォルニア州と同じ。ブラジルでは、日本国土の3分の2もあるパンタナル大湿原に1,500haの大水田農場があり、飛行機播種で1,500名の従業員がいる。アジアの集約的小型稲作とは、大分趣が違ふ驚異の映像が沢山みられた。

フィリピンのルソン島、山岳地帯イフガオの棚田群は世界遺産にも登録され観光客も多い。急峻な斜面で豪雨、浸食、崩壊の連続だが、人力だけの過酷な労働（栽培 収穫 修理）を1,000年も続け奇跡に近い。

インドネシアのジャワ本島では、土壌浸食が激しく、棚田の重要性が見直されている。バリ島の伝統的水管理で用水施設、森林保全共に完備、オールシーズン稲作可能である。タイのデルタ地帯の浮き稲は5mもの長さのびる。但し収量は多くない。ベトナムのメコンデルタでは、雨期には水位が上がって冠水してしまうほどである。稲と魚が同居し、水路（船運）、排水、用水、下水、洗濯、水浴、漁業用のインフラとしても活用されている。最後に中国の四川省成都の近郊

の256年BCに創設されたという「都江堰」は67万haの灌漑網を完成させ、今でも人々の生活に寄与している。雲南省にはいくつもの広大な棚田群が展開する。近々世界遺産に登録されるもよう。

米という字は「八十八」と書き、米作りのお百姓の苦労の数を思っ一粒たりとも無駄にするなど、親に再三言われながら育った。先の緊急輸入時、一部の週刊誌がタイ米を「こんな米を喰えというのか?!」との表題でくさし、政府批判をした時の悔しさと恥ずかしさはなかった。米作りの農作業はいつの時代も何処でも大変である。

代かき：土壌の軟化、漏水防止を図る。均平化のため、丸太を転がす事もあるそうだ。

田植え：過酷な労働だが、何故直播撒きにしないのか？つまり、苗床を作り育て苗を植えかえるような面倒に何故こだわるのか？いろいろ議論されたが、植え替える時期を選んでいい苗を選び、高収穫、高付加価値、害虫雑草対策にもなるのではないかの安井理事の意見に納得した。現在では、苗、肥料一緒にできるミラクル田植え機も開発されているとのこと。

刈り取り：手刈、バインダー、コンバイン使用など多種。田舟を使ったり、粳の部分だけ切り取る風習もある。

耕運：人力、畜力、機械があるが、排水改良、区画拡大、圃場整備など進んできた。通年湛水や不耕起農業で手間をばぶき、小動植物の生態系にも好影響にもなるという意見もあり、又、頸城地方のように雪解けを待っては、田植え時期を失する地方は、刈り取りと同時に耕運するところもある。

最後、日本の美しい水田 高知・梶原、石垣が特徴の長者 香北、水源林で溜池のない長野・更埴、珍しい天水頼りの千葉・鴨川、石垣の福岡・星野や奈良・明日香、新潟・頸城地方などの映像。各地のオーナー制度の仕組みと発展。早魃に強い谷津田から大区画水郷潮来などの映像をふんだんに見せて貰った。そして水田の多面的機能、湛水機能、水源涵養のための調整機能、水質保全、土壌保全機能、隔壁型水路、三連水車、唐津・登呂などの水田遺跡の紹介があり、歴史的な伝統芸能、文化活動が、現在の市民活動に繋がり、生態系保全への関心、動植物の観察、癒し憩いをもらえる景観、環境機能まで言及された。

講演のあとの親睦会では、「田んぼ好き」の諸先生方も「米汁」効果で満面に笑みが満ち満ちていたことは言うまでもない。

以上紙面の都合で駆け足聞きとり報告となったが、米作りの多様性とその苦労、聞けば聞く程興味深い。いつか世界各地の様々な米を使った米料理を試食できたらと思うし、「米の来た道」を再度おさらいしたいものだ。

日本の棚田百選



内成の棚田 一列府市大字内成一

棚田里山景観研究所 後藤 幸彦

月見石から見渡すと、視野 270 度を超える、パノラマに棚田が広がる。大分県別府市大字内成の棚田です。南に開いた斜面に広がる 30 数 ha の棚田の景色は、ぜひとも一度見ていただきたい。

2000 を超す源泉数を誇り、日本有数の温泉地として知られる別府市。その中心地から約 12km（自動車で 20 分弱）の距離に、内成の棚田はある。

現在、耕作されている棚田は約 35ha。以前は 40 数 ha を超す棚田で稲作が行なわれていた。

平安中期から開発されたであろうと言われている内成の棚田だが、詳細な文献もなく、府内藩（大分市）の石高帳からみると、正保年間から明治初年までの約 200 年の生産高の増加は 20%。これから考えると、西暦 1600 年前後には内成の棚田の原型は出来上っていたと考えられる。

つい最近まで検証したことのなかった棚田の枚数は、2006 年 12 月に航空写真を使ってカウントした結果では、1340 枚を超えていた。

内成で生活している人たちにとって、ごく普通の風景であった棚田が、「日本の棚田百選」に選ばれ、訪れる人が徐々に増え始め、2000 年から始まった「別府八湯オンパク」という長期滞在型の観光メニューの中に組み込まれたり、別府市や大分市にある大学生たちの稲刈、田植え体験などを行い始める農家がでてきたり、都市との交流が徐々に動き始めている。

人口の 3 分の 1 は高齢者になっています。けれども、数は少ないけれど内成には後継者がいます。高齢者が多いということは知恵を蓄えた方がたくさんいるわけで、この知恵をどう継続していくかという工夫が必要であろう。

眼前の人の知恵の素晴らしさはなかなか身近な者には理解できないものです。外部から訪れる若者たちなどの新しい視点を取り込んでいくことで、この知恵も継続されていくのではないだろうか。

2007 年 2 月 16 日には、「美しい日本の歴史的風土 100 選」にも選ばれた。



棚田の多面的な機能が見直されてきた昨今、棚田の地域で、心豊かな生活ができるような、新しい産業が創出できないかと日々考えながら、保存のために取り組んでいる。

昭和 30 年代後半からは稲作栽培に特化していた農業だったが、空地进行をできるだけ利用して作物を栽培していた時代に帰って冬の麦作や、稲作不適地での野菜づくりなども再度取り組む価値はあるように思う。

一時期、ナスの味は天下一品と別府の街で評判を得ていたようである。この他にもあるであろう地域独特の野菜などの発掘など、取り組む課題は山積している。

昔の知恵を掘り起こし、別府の観光業界と協働して、新しい方向を見つけていけば、内成の棚田は、まだまだ継続でき、遊休農地も復活できる可能性があると思われる。

それ以外にも、地元の若者が働けるような、里山などを使った新しい産業も創出できれば、大変楽しい地域ができると思うのである。

その一つとして、内成出身の大学生が、内成を研究のフィールドとするゼミに所属して研究を始めたたり、大学卒業後も、内成でしばらく農業をしてみたいと考えている若者もでてきている。

観光地“べっぶ”の後背地であるという立地を考えた棚田の振興が必要になって来るだろうと思う。

新刊紹介

石井素介著

「国土保全の思想 —日本の国土利用はこれでよいのか」

菊判上製 342頁、2007年3月
古今書院刊、3990円(税込)

地理学を専門ベースにして、災害論、資源論、土地利用論、農村構造変化論など、多彩な分野で50余年にわたり研究調査・教育活動を続けてきた著者によって、「国土保全の思想」集大成の書が上梓された。

本書は、序論：国土保全の思想とは何か、第1部：国土保全論への旅の奇跡—戦後の災害頻発期に出発してからの半世紀、第2部：戦後災害頻発期の調査活動—その現地体験から何を学んだか、第3部：災害問題・資源問題を理論的に把握するための試論、第4部：ドイツにおける「地域」の自立と国土空間整備の思想的基盤、第5部：国土保全論の構築に向けて、第6部：むすび—国土保全の思想確立への課題、からなる。日本各地における豊富な調査記録が盛り込まれていて、大部だがとても読みやすい。文字通り地に足が着いた論述となっていて、それぞれ重いテーマについて分かりやすく説かれている。ニューディール期のアメリカ資源保全政策・思想や、ドイツの水資源開発、農村整備政策、地域思想など、外国の事情についての記述も魅力的である。

著者は、まえがきで、“本書で読者に訴えたいと思うのは、まずこの国の国土のあり方について「考える人」になってほしい、国土利用の醜悪さに気付いて「嘆く人」・「怒る人」・「声を上げる人」になってほしい”と記している。

本書の最大の魅力は、著書がこの姿勢を静かに貫いていることが伝わってくることだろう。研究・教育者までもが、激しい競争社会にあって「おかね」や「おかみ」に迎合せざるを得ないかの風潮が強い今日、ひたすら地域の現場を観察し、自らの思索を深めつつ歩む、その着実な姿を髣髴とさせる文章は、研究教育に携わるもののみならず、行政官、NPO・市民活動リーダー、地域プランナーなどにとって、襟を正すべきある種の指標となるに違いない。

まずは、国土環境のこれ以上の荒廃からわが国を護らなければならないと感じている方々のための必読の書として推薦したい。しかしそれ以上に、とりわけ若い諸君には、一人の有能かつ誠実な人格による半世紀に及ぶ「国土保全の思想」生成に至る一連の“作業現場”の公開展示、という絶好の学習機会を逃すことのないよう、本書の精読を心から勧めたい。

(推薦者：千賀裕太郎)

事務局ニュース

理事会体制について

木村尚三郎会長のご逝去に伴い、新会長選出までの間、会長代行を中島峰広副会長が務める事になりました(第53回理事会にて決定)。

棚田学会誌の原稿を募集します。

投稿は、論文、調査報告、会員通信とし、原稿枚数は概ね次の通りとします。

- 1) 論文 400字詰原稿用紙 40枚程度
- 2) 調査報告 400字詰原稿用紙 20枚程度

400字詰原稿用紙 10枚以内

〆切は4月末日、(論文は3月末日)、詳しくは投稿規定をご覧ください。

第16回現地見学会・研究会のご案内

「明日香村稲淵の棚田」と歴史的景観を訪ねて

日時 2007年3月31日(土)、4月1日(日)

参加費 17000円

定員 24名

研究会(3月31日午後3時～)

報告①「農村と都市をむすぶ棚田オーナー制度」

前田真子

(広島工業大学環境学部環境デザイン学科講師)

高尾堅司

(川崎医療福祉大学医療福祉学部臨床心理学科助手)

報告②「奈良盆地の農耕儀礼とノガミ行事について」

樽井由紀

(奈良女子大学大学院博士後期課程院生)

棚田学会賞基金の募集

初代会長故石井進先生の遺徳を偲び、棚田の保全に資する優れた業績を表彰するために、「石井進記念棚田学会賞」(平成16年8月11日)を設け、毎年全国各地から応募者を募り授賞を行っております。

円滑な運営をはかるため、応募並びに受賞にかかる費用として棚田学会賞基金を募っております。

会員皆様のご理解とご協力の程宜しくお願い申し上げます。

編集後記

「暖冬」も喜んでばかりはいられません。タクシーの運転手さんが地球温暖化の危機を語っていました。今号から高橋久代、千賀裕太郎それに昨年まで農業土木学会事務局で編集業務をされていた吉武幸子さんが編集作業に加わりました。このメンバーでの初仕事が木村会長追悼号となったのは残念です。会員みんなの通信、学会誌になるよう努めますので、倍旧のご協力を。(千賀)